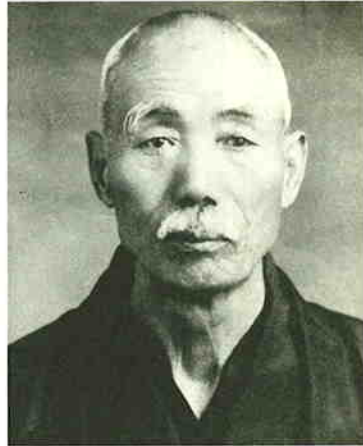


開拓の群像(十)

信仰による農場開拓

近藤直作



近藤直作

先祖の故郷を、愛媛県にある人の、現在佐呂間町内に住んでいる人の中に、明治の昔、富丘の地に近藤農場を経営していた近藤直作と言う人の、直接・間接の影響があつて、佐呂間に来た人が多い程の、近藤直作は、佐呂間町の先駆者の一人である。

生れた年が、慶応二年と言うから、一八六六年、今年佐呂間町開基百年目が、一九九四年だから、一二年前になる。この年に直作は、「愛媛県周桑郡国安村」にて生れたと言うのだ。

直作の、若い頃は、父の柳治が事業家であ

つたが、紆余曲折を経て行く若い頃、可成りの経済的に苦勞している。(直作のこの頃の話は、紙数の都合もあるので省略)

直作が、北海道開拓を志したのは、明治二四年に、志賀ギサと結婚したことも原因の一と思われる。それは、明治三三年三月妻ギサの兄、義兄の志賀勝治が、北海道の新開地における農業の、有望な話を聞いたことが、直ちに決心し、北海道視察に来て、秋の九月に新十津川村に一応落ちついた。

明治三四年の一年間は、北海道での、農業や土工夫等での、北海道での労働を体験して、翌明治三五年に、美深にて、一二〇町歩を得て、原始林を踏み分けて入地し、いよいよ、北海農業開拓に取り組んだのだ。

直作が美深で開墾に着手し始めたころ。先住の開拓者や、この年直作入植年に入植した子弟の教育について。小学校建設の話が持ち上つて、直作の所有地の一角が、その地域の学校敷地にふさわしいとのこと。美深の有志の人達に、学校敷地の寄付を頼まれ、一二〇坪を寄付をし、校舎資材・段取資金等を寄付をして、子弟教育の美深の学校建設に大いに貢献をした。それは明治三六年のこと。

その頃、山口庄之助牧師とピアソン宣教師が旭川から、毎月一回伝道に美深に来るようになった。懇切な両先生の話で、直作をはじめ美深では可成りの人が、キリスト教の信者になって来たので、明治三七年一月に、山口庄之助牧師が、美深に伝道者として定住する

ようにやって来た。明治三六年ごろから、キリスト教会堂建設の話が持ち上っていたが、山口牧師が美深に来たときは、未だ教会は完成していなかったもので、直作の家に完成まで一諸に住むことになって、朝晩の山口牧師ご夫妻の、信仰者としての姿を見ているうちに。直作は、自分も救道者となろうと決心をした。キリスト教の、直作が求道者となったことが、佐呂間の富丘の近藤農場が、一風変わった形の農場が現られるのだ。

直作は、美深農場も軌道に乗り出したころは。明治三五年三六年の凶作の後であつたため、思いがけない程順調よいので故郷の愛媛県より、兄弟たちを美深に呼び寄せたりし。山口庄之助牧師の定住する教会堂も、信者一同の労力の奉仕、浄材で完成させた。時に明治三七年秋となつて来た。山口牧師先生一家が無事移転することが出来た。

近藤直作が、キリスト教の求道者となつて来たが、本当の洗礼を受けたのは、

明治三八年三月末深夜、山口牧師夫人が危篤と知らせが来て、急いで駆けつけたとき、も早臨終であつたという。その山口牧師夫人の、キリスト信徒の死は、真に故郷に帰るがごとき有様を見て、いよいよ自分も決心して、山口牧師夫人の死後、明治三八年四月二日旭川教会坂本直寛牧師から受洗した。(近藤直作北辺のバイオニア・自伝) P三五

美深の開拓時代の、数々の近藤直作ならではの物語りが沢山あるが。美深開拓時代に、

キリスト教の、真の信者となった経緯と、簡単に功績を述べるのみにして。佐呂間の富丘の近藤農場の、開拓経営について述べて見よう。

オホーツク海岸再移住 佐呂間農場に向う

「近藤直作北辺のバイオニア・自伝」のP三九を少し引用して見ると、美深農場の一二〇町歩の、附与検査が明治三九年に終って、親族兄弟にそれぞれ分配したころ。

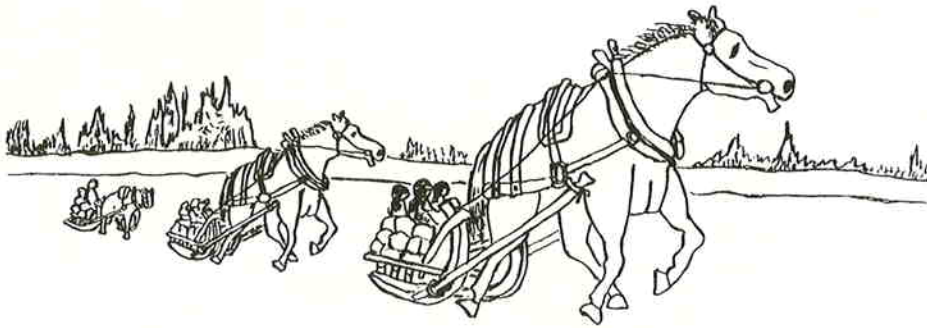
〔ここから引用〕

たまたま大久保虎吉氏より、北見国常呂郡佐呂間原野にある吉田松太郎名儀の、未墾地二百町歩を引き受けないかという話があり、わずか七百円で譲り受けることとなったのである。

直ちに北見(佐呂間(当時の鑑沸))に赴き、实地視察の上、栄駅通所(中佐呂間)に着手、小屋四戸の建築を依頼して帰宅。この度も、親族兄弟協同し、美深、佐呂間と手分けして経営方針を定め、地方的に優れた耕馬数頭に馬糧を仕立て、農具を積み、義兄志賀鹿造一家その他のものをひき連れ、明治四〇年三月一〇日再移住の旅に美深を出発した。

名寄で、自分達一行は、佐呂間の土地の購入の世話をしてくれた大久保家に泊り、一行はさらに興部、紋別、湧別、常呂と泊りを重ねて東行したのである。その間、針葉樹の巨

明治40年3月13日 近藤直作一行
サロマ湖の氷の上東行



木の密生した森林をくぐり、放牧馬がもの珍らしげに近づくほか、人影のない原野を横きり。(当時の、オホーツク海側の状況が判るので、引用してきます)、オホーツク海岸に出ると、見渡かぎりの流水群の壮観に目を見張った。サロマ湖畔の蜿蜒たる帯状の砂洲にかかる、吹きさらしのため砂地が露わられて、糧が利かない故、湖上に乗りにれた。それも春先のこととて、水が融けて各所に青く澄んだ水溜が出来ていたが、幸い事なく通過することが出来た。

(注・次に面白い話)

湧別、常呂の中間のワッカで休憩したとき、宿の主人が、移住者の一行我々を、珍客とばかりに、ご馳走しようという。見てみると、放し飼いの豚を追いかけて捕え、腎部の肉を切りとって煮てくれたのには驚いた。みればどの豚も腎部に、小判型の傷痕を残していた。「十二切り取っても跡に塩をすりこんでおけばナントモない」と澄していた。

常呂港にて、食料炊事用具を買いととのえて、中佐呂間栄駅通所を経て、三月一五日に我が再度農場拓きの、佐呂間農場に到着した。これと前後して、行を共にした信仰の同志は、山口愛光、田兵太郎の二氏、人夫としては松木清作、志賀利三郎、前田久治一家、田中長治親子、三浦一家などであった。

(注、特殊な人北海道の開拓者近藤直作。

なのですと私は思います。近藤直作の「自伝」を引用掲載では、紙数が足りませんので、私

の知り得たことを書き記るして見ます)

近藤直作が、経済力のあつたことを具体的に書けば、可成りの長編になるので、省きますが、キリスト教を信仰の中心にした。農場であつたので、直作自伝の、P 四一引用

第一、禁酒農場たること

第二、青年教育のため毎日曜礼拝を守り、先輩諸氏の講話を聞くこと

第三、従来の個人経営になるべく進歩的開墾方法をとること

この第一の個条は、大正一二年生れの私は、物心のついた頃、大人の話の中に可成り批判をする者がいたのは確かにあつた。この善し悪しもこれ以上のことは省きます。

第三の個条のことは、進歩的開墾方法をとることは、直作自から実行している。開墾プラオを馬に挽かせて大地を耕し返すのに、耕馬三頭立て、五頭立ては普通だった。

直作は、実は佐呂間農場では、何処かえ用件があつて出かけるときは、自から馬の手網を持って、馬車掛け。冬は馬櫛掛けで馬を追つたが、畠の開墾は殆んど他人に、出面賃を拂つてのことだったと言う。早くに故人となつた河野勝高氏は、

「近藤はん(伊予訛)が一鍬一鍬と鍬を振るような人だったら、農場の親方なんかになれへんのぢあ。一人の力に限度がある。頭の力の限度は、優秀な人は無限ぢあからのう」

そう言つて、勝高氏は、

「わしも、開墾のための火入れまではしたが、

荒地の開墾は、人にやらせた」

私の知つている直作のことで、直作は、優秀な馬喰う豊田竹五郎と言う人を信用して、大金を預けて、馬を購入したり、馬の仲買人のようなことをしている。豊田竹五郎は正直者、直作から手当をもらうだけで、直作に根室馬の安くて優秀な馬が沢山いることを教えたら、是非その馬を買つて来てくれと頼んだら、最初に購入したのが一六頭だった。佐呂間にはそのころ、開拓移住者の増加の一途をたどつていゝころ、馬はいくらでも怒しい人がいて、直ちに売れて直作は大変に儲かつたので再度、根室馬を購入に行かせたら、次に二頭連れて来たと言う。その馬も利益は、直作の利益になつた。だが直作は直作なりに豊田竹五郎に、土地一戸分お礼の意味もあつて与えている。

美しい主従関係の話である。

佐呂間町史S 四一年発行P 四八四の一四行目に、左のように記るされている。

このように、急激な馬の需要に対し、馬の移入に努力した牛馬商の役割は重要であつたが、初代牛馬商組合長豊田竹五郎は、根室、釧路地方より、多数の優良馬を導入し、馬産の基礎をつくることに貢献した。

明治四三年に、直作の母親が亡くなった。

葬儀は、山下善之助先生の司会で行なつた。くわしく書く紙数がないので省きますが、

直作自伝P 四六

さて母の永眠の姿は多くの人々に感動をあたえ、求道者続出六〇名に及び、専任伝道者の必要起り、山口庄之助先生の赴任となる。

先生の一家は会堂建築までは、わが家に同居せられた次第である。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただの一粒のままである。しかし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」、母の遺言の通り佐呂間教会が、母の死を動機として生れ出づることとなるのである。

明治四四年七月二五日、佐呂間教会の建設式を挙行、(申し訳ないが省きながら記して行きます)。会衆六〇名式典に入る会場がなく、近藤農場用の、澱粉工場建築中の水車場を臨時の会場にしたと言うから、近藤農場の澱粉工場は、明治四四年に創業していると思われる。

教会堂は明治四五年落成し、山口牧師先生は、引越し出来た。この教会が、昭和四四年五月まであつて、五七年間富丘一〇線三六号にあつたことになる。

武士教授所(小学校)の建設委員に明治四三年になつて校舎建築に貢献をしている。四三年の完成の校舎は完成の其の夜、浮浪者によつて焼失、明治四四年に、再度の建設委員となつて、やつと当時の児童が授業を立派な校舎が出来るようになった。

それまで、岐阜団体長大野弘の奉仕で寺小屋の形で、児童は読み書を習つていたことは、別記事、「大野弘」のところに書かれている

から、ここでは省略する。

開拓官農の方に話を移します。

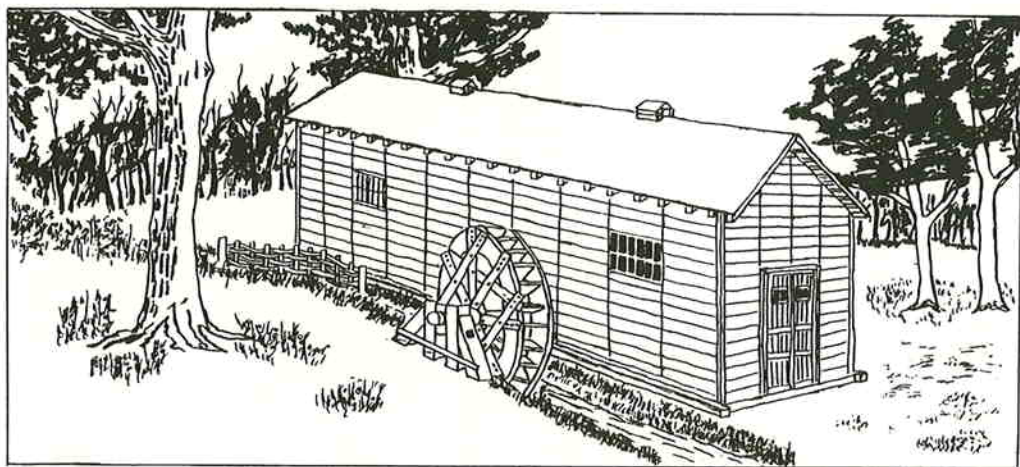
食糧の自給確保に先づ力を注いだことは言うまでもない。当時の手取り早く畑作に作付されたのは、課麦、馬鈴薯、稲黍、ソバ等であつたというが、馬鈴薯澱粉加工場を水車によつて大々的に行なつた。先程一寸別なことにふれたが。

水車の動力でもつて、精粉精麦をしたとの記録はないが、常識的に考えたら、水車施設を有効に直作程の人物なら行つたでせう。

次に、稲作に貢献している。川西で大正七年試作成功の記録があるが、それは岐阜県からの移住された大野団体の人達だったが、近藤農場にも、米作が可能と判つたら、直作は農場主としての、農場内の造田を、大正一二年に完成させている。富丘での開拓の同志渡部長太郎等の外、佐呂間村内の各部落の有志ら共々、造田に必要な条件の、水利権同盟のことで道庁に赴いたのが大正一五年三月であつた。

(注・一応近藤直作の、北辺の農場主としてのことを、駆足のような文章にしてしまつたが、簡単に結んで見よう)

大正二年(一九一三年)に、子供達の、高等教育を考へて、札幌に家族を住わせることにし、直作は、佐呂間、美深、札幌と、年間幾度も本人は、転々と旅をしなければならぬ忙がしい人となり、交際する人が、名前を揚げたら有名人がぞくぞく並ぶがこの際省き



ます。

そうして、最後は、

昭和一四年八月三日、町内の、出征兵見送りのため、旭川市に赴き、翌四日日常のごとく五時起床、身支度をなす時、突如脳溢血を起して急逝した。行年七三年弱

直作の長男治義の記の転載なのです。

父の亡骸は、そのまま自動車に「美深に移され、美深教会牧師、深山佐太郎氏によつて、葬りの諸事はこばれた。

尚、佐呂間と近藤直作の關係深さを次に述べませう。

北見佐呂間より教会を代表して、会葬された山口愛光収入役は、真執な口調で――

「私たちは、近藤さんにお世話になつたというよりも、育てて頂いた。私同様の關係で佐呂間に居住するものが二百戸にあまる。偉大な実行力をもつて活動された。靈界のパイオニアでもあつた。抱擁力と物に動じない胆力には敬服した。その勇氣と力とは、実は信仰によつて修得されたものであつた。地上で再び会えないことは寂しい限りであるが、喜んで天国への凱旋將軍をおくりたい。

(補記・佐呂間教会の山口庄之助牧師は、前年の昭和一三年二月に亡くなられている)。

文責 徳永 良行